

研究報告

文献からみた『社交性』の検討 —高齢者ケアへの視座—

小林 れい子*¹、水戸 美津子*²

Literature review : Study of Sociability —Perspective of elder care—

KOBAYASHI, Reiko MITO, Mitsuko

キーワード：社交性、高齢者、ケア

要 旨

本研究では『社交性』をキーワードに文献検討し、その研究目的や枠組み、『社交性』の捉え方を分析考察し、『社交性』について整理した。その結果、『社交性』とは、社会構造や機能に関わる個人特性を基盤とし、個人の社会的存在における目的を達成させるための、自律した生活の質や情報収集、生活スタイル、対人関係における行動に影響を与える因子や関連要因であると捉えることができる。また、『社交性』とは「自己が帰属する社会において、その存在意義を全うするための意識、行動である」と定義することができ、『社交性』をキーワードに今後の支援の仕方を構築することの必要性を示した。

I . はじめに

我が国の平均寿命は、男性 81.09 歳、女性 87.26 歳となり（2018 年）、総人口に占める 65 歳以上の高齢者割合は 27.7%と世界最高となった¹⁾。しかし、すべての高齢者が健康に生活しているわけではなく、後期高齢者においては受療率が高く、さらには介護を必要とする要介護認定者数も増加²⁾している。また、従来は病気や障害をもった高齢者の多くは病院や施設に入所することが多かったが、国の施策である地域包括ケアシステム推進の方針もあり、在宅で訪問サービスや通所サービスを利用しながら生活する高齢者も増加している。

本研究³⁾らは通所サービスのひとつの形態である『通所デイケアサービス』を利用している配偶者がいない高齢男性を対象に、その適応のプロセスに

注目して研究を行った。その結果、配偶者がいない高齢男性は、デイケアで様々な場面で「居甲斐づくり」や「生きがいつくり」をしながら適応していくプロセスがあることを明らかにした。このプロセスには、『決め事を守る』『デイケアの心得を遵守する』『他者との衝突を避ける』『経歴の話題を避ける』『不承不承認する』といった「自分を調整する」という概念があった。これらの概念は、石村⁴⁾の、『『社交性』とは、人間が他者と共同生活を送る上で、必然的に求められる要素、それは例えば、社会のルールの遵守や争い事を導くことのない振る舞いなどの全てを包括しているものとして理解されていたと見ることができる』との指摘と同様のものと解釈できる。

『社交性』が人間関係の構築のための必要な態度や行動であるとするなら、『社交性』はネットワークづくりとソーシャルサポート授受のひとつの要素であ

*1：聖徳大学看護学部看護学科講師／*2：聖徳大学看護学部看護学科教授

るとも考えられ、高齢者の生活適応を支える重要な概念と捉えることができる。特にケアを必要とする高齢者には、個人と個人とのつながりである社会的ネットワークは不可欠である。そして社会的ネットワークの構築も社会的援助、社会支援と言われるソーシャルサポートのやりとりにも、新たな人間関係の

構築が求められる。

そこで本研究では、先行研究において『社交性』がどのように捉えられ研究されているか文献研究を行ったうえで、『社交性』という側面から看護学における高齢者ケアの新たな視座を得ることを目的に検討した。

表1 検討文献の研究目的の分類

カテゴリー	サブカテゴリー	内容
尺度	開発	好奇心探索尺度の作成
		友人関係期待測定のための尺度開発
	検証	自主性を構成する尺度の妥当性検証
		特性検査の妥当性検証
		社交性指数とソーシャルキャピタルの関連の検証
		高齢者のコミュニティ感覚、近隣効果尺度が健康と関連の検証
既存尺度の妥当性検証		
人間関係	対人関係	意志決定に影響を与える人との関係性
		友人関係期待の内容分析
	コミュニケーション	コミュニケーション意欲を左右する要因の抽出
		交流ネットワークの構成
個人特性	自己評価	自己イメージの変化と経験との関連性
		自己目的化と友人からの印象との関連
		自己のあり方とコミュニケーションのあり方との関連性
	傾向	社交性と学習成果の関連
		社会的スキルの内容
		言葉の使用と本人評価との関連
		性格と対人認知の関連性
		レジリエンス要因の抽出
		感情表出の課題
		化粧の効果
	職業	対人的影響の実態
		対人態度の傾向
		行動傾向と適正尺度の構成
		適正の変化と特徴
	健康状態	精神的健康と精神活動との関連
		パーソナリティと症状の関連性
心理的ストレスの実態		
生活スタイル	生活の質	生活の質に影響を及ぼす因子
		食生活と住居との関連性
	情報入手	携帯電話、電子メールの利用実態
		情報メディア活用の利用属性の特徴

II. 方法

1. 対象文献

研究の対象とした文献は、CiNii を用いてキーワード『社交性』で検索した1996年1月から2018年11月までの国内文献81文献を対象とした。

2. 分析方法

検索した81文献のうち原著論文、研究ノート、報告、資料の44⁴~47⁷文献を分析対象とした。文献を研究の分野、年代、研究目的で整理した。この間、本研究者らで繰り返し検討し、妥当性・信頼性の確保に努めた。

III. 結果

1. 検討文献の研究目的の分類 (表1)

研究に明記された目的を、内容の類似性から整理した。研究目的は、「尺度」「人間関係」「個人特性」「生活スタイル」に分けられた(カテゴリー)。「尺度」は開発と検証、「人間関係」は対人関係、コミュニケーションの各々2つのサブカテゴリーに、「個人特性」は自己評価や傾向、職業、健康状態の4つのサブカ

テゴリーに、「生活スタイル」は生活の質、情報入手の2つのサブカテゴリーに分類された。カテゴリー、サブカテゴリーは表1に示すとおりである。

2. 検討文献の研究時期と研究分野 (表2)

1960年~1989年には4文献あり、心理学系2文献、医学系、健康・スポーツ系がいずれも1文献であった。1990年からの10年間には7文献で、心理学系、社会学系、医学系がいずれも2文献、生活科学系が1文献であった。2000年からの10年間には17文献あった。内訳は社会学系6文献、看護学系5文献、心理学系、教育学系がそれぞれ2文献、情報学系と人文学系は各1文献であった。2010年から2018年11月現在までは17文献で、社会学系7文献、心理学系4文献、医学系3文献、看護系、情報学系、人文学系はいずれも1文献であった。

3. 検討文献の研究対象者

検討文献の研究対象者は、大学生が18文献と最も多く、次いで中学生、看護師がいずれも3文献、社会的活動参加者、障害者が2文献であった。以下、新入社員、保育士幼稚園教諭、教員、団地居住者、妊婦、母親、高齢者、老人保健施設入居者、COPD、精神疾患、がん治療患者、HIV患者、ウェブモニター

表2 検討文献の研究時期と研究分野

期	文献数	研究分野	
		分野	文献数
1960~1989	4	心理学	2
		医学	1
		健康スポーツ	1
1990~1999	7	心理学	2
		社会学	2
		医学	2
		生活科学	1
2000~2009	17	社会学	6
		看護学	5
		心理学	2
		教育学	2
		情報学	1
		人文学	1
2010~2018	17	社会学	7
		心理学	4
		医学	3
		看護学	1
		情報学	1
		人文学	1

表3 検討文献の研究対象者

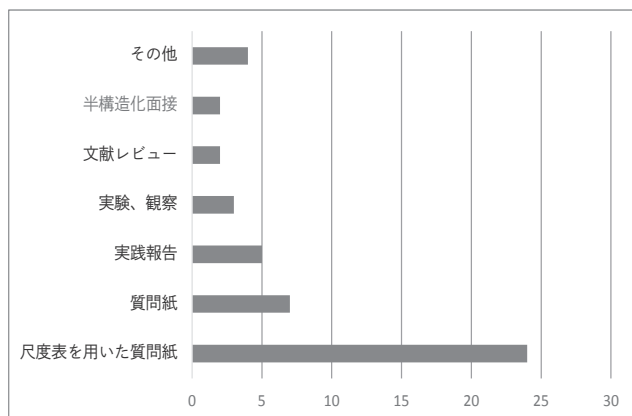
対象者	文献数
大学生 (留学生含む)	18
中学生	3
看護師	3
社会活動参加者	2
新入社員	1
障害児者	2
保育士、幼稚園教諭	1
教員	1
団地居住者	1
妊婦	1
母親 (育児)	1
高齢者	1
老人保健施設入所者	1
COPD 患者	1
精神疾患患者	1
がん治療患者	1
HIV 患者	1
ウェブモニター	1

が各1文献であった。

4. 検討文献の調査方法 (図1)

調査方法は、尺度表を用いた質問紙によるものが最も多く24文献で、用いられた尺度は特性シャイネス尺度、QOL判定スコア、キャッテル・パーソナルテスト、自尊心、多面的感情特性尺度、評価尺度、対人勢力尺度、対人イメージ、ポジティブ・イリュージョン尺度、自己肯定感尺度、セルフ・モニタリング尺度、他者意識尺度、情動的共感性尺度、内的モデル尺度、社会的スキル測定、感情的コミュニケーション尺度、対人コンピテンス尺度、自己目的尺度、他者認知尺度、抑うつ尺度、自尊感情評価尺度、性格傾向尺度であった。次いで日常の行動、他者との交流、自己満足度、友人関係期待、育児不安に関する質問紙、実践報告、化粧を施す実験観察、文献レビュー、半構造化面接があった。

図1 検討文献の調査方法



5. 検討文献の『社交性』を示す内容 (表4)

『社交性』を説明している内容の類似性からカテゴリー化した。内容から37コードが抽出された。12項目と6サブカテゴリー、3カテゴリーに分類された。カテゴリーは【】サブカテゴリーは「」項目は〈〉内容は斜体で示す。

【対人】は「関係性」「姿勢態度」「行動」で構成され、さらに「関係性」は〈人見知りしない〉〈交流関係が広い〉〈自尊心の高まりを感じる〉に分類された。具体的には一緒に行動する、誰に対しても分け隔てなく接する、親密な友達になるまでの時間が短い、話かけられれば対応する、色々な人とつながりを持っている、他者に好かれる、同性の間に人気がある、なんでも話し合える関係になりたい、分かち合う、相手の気持ちのちょっとした変化も感じる、楽しい

雰囲気を作り出すがあった。「姿勢態度」は〈心構えを持つ〉〈信念を持つ〉に分類され、内容には正義感を持っている、関係がうまく維持できることに心がける、人間関係は財産、他者と関わることは重要なことがあった。「行動」は〈積極的である〉〈意欲的である〉に分類され、内容には活発である、集まりによく出かける、人と話す、人と出会うと挨拶する、話しかける、積極的に関わる、頭の回転がはやいがあった。

【気性】は〈気立てがよい〉〈高いコミュニケーション力を持つ〉で構成され、内容には親密さ親近感を感じる、個性的、他者との交わりに緊張や特別のエネルギーを必要としない、他者との関わりを好む、人との関係をとることが上手い、人と親しくなることが得意、誰にでも気軽に対応できるがあった。

【性格】は、「外向性」と「経験」で構成され、「外向性」は〈明るい雰囲気がある〉〈自律している〉に分類され、内容には、明るい、ユーモアがある、笑顔でいる、知的、他者に対する不安や恐怖を持たない、常に積極的に他者と交流しようとするがあった。「経験」はすぐにうち解けることができる、知らない人とも話すことが苦にならないといった〈豊かな経験をもっている〉ことであった。

IV. 考察

1. 研究の枠組みから『社交性』を考察する

検討文献の研究目的には、個人特性を評価するためのパーソナリティや対人関係を測定する尺度開発と検証というものがあつた。検討した文献中の研究目的として挙げられた尺度およびの項目の内容から、『社交性』を考察する。

柳井⁴⁸⁾は、尺度開発について「教育心理学で大学の学部学科選択のための適性検査をつくり、高校教科科目の得意不得意や大学卒業後の職業志向といったように学部間の適性を分けるとい、いわゆる判別性、妥当性のことを行つた」と述べている。尺度には、自己の傾向や評価、職業や健康状態の個人特性が確認された。また、生活の質や情報収集、生活スタイルの実態やその特徴が抽出された。このことから、『社交性』とは個人を示す総体や生活に影響を与える因子や関連要因となっていると捉えることが

表 4 検討文献の『社交性』を示す内容

カテゴリー	サブカテゴリー	項目	内容
対人	関係性	人見知りしない	一緒に行動する
			誰に対しても分け隔てなく接する
			親密な友達になるまでの時間が短い
			話かけられれば応答する
		交友関係が広い	色々な人とのつながりをもっている
			他者に好かれる
			同性の間に人気がある
		自尊感情の高まりを感じる	なんでも話し合える関係になりたい
			分かち合う
	相手の気持ちのちょっとした変化も感じる		
	楽しい雰囲気を作り出す		
	姿勢態度	心構えを持つ	正義感を持っている
		信念を持つ	関係がうまく維持できることに心掛ける
	行動	積極的である	活発である
			集まりのよく出かける
			人と話す
			人と出会うと挨拶をする
		意欲的である	話しかける
積極的に関わる			
頭の回転がはやい			
気性	気性	気立てがよい	親密さ親近感を感じさせる
			個性的
	高いコミュニケーション力を持つ	他者との交わりに緊張や特別のエネルギーを必要としない	
		他者との関わりを好む	
		人との関係をとることが上手い	
		人と親しくなることが得意	
		誰にでも気軽に対応できる	
性格	外向的	明るい雰囲気がある	明るい
			ユーモアがある
			笑顔でいる
			知的
	自律している	他者に対する不安や恐怖を持たない	
		常に積極的に他者と交流しようとする	
	経験	豊かな経験を持っている	すぐにうち解けることができる
			知らない人と話すことは苦にならない

できる。

研究対象に大学生が多かったことについては、ハヴィガーストの青年期の発達課題である「一人前のおとなとして個人を評価する」ための指標として『社交性』の測定が必要であったとするなら、『社交性』とは個人の自律性を促すひとつの要素であるとも考えられる。

検討文献の研究分野は社会学系が最も多く、次の心理学系と合わせると全体の55.5%と半数以上を占めていた。社会学とは、人間の行為や文化と関連づけながら、共同生活の構造や機能、社会の変動について研究する学問である。そして、心理学とは、ある現象に対して、人間の心がどのように反応するか、どのような行動をするのかを、科学的な手法で研究する学問である。このことから『社交性』とは人の心の反応に影響を与え、社会の構造や機能に関わる要素であると捉えることができる。

検討文献の『社交性』を示す内容を整理した結果、気立てがよい、高いコミュニケーション能力を持つといった気性が抽出された。また、明るい雰囲気がある、自律しているといった外向性と豊かな経験を持っているといった人柄、人となりを示す性格が抽出された。一般的に気性とは、生来の特質で環境から影響を受けることがない個人の特性とされている。一方、性格は品性、人となりといった経験から形づける個人特性であると理解されている。このことから、個人の特質や特性は、『社交性』の基盤となる重要な要素であると捉えることができる。そして、対人関係に心構えや信念を持つことが抽出されたことから、『社交性』には、気質や性格を補填する姿勢や態度があることも示された。

対人関係として人見知りをしない、交流関係が広いといった行動の特徴が抽出された。山崎⁴⁹⁾は、「社交とは人が友情の関係を結び、育てるための行動だと定義できる」とし、次のように述べている。①人が家族のつながりを固め、恋人への思いを高め、戦闘集団の団結を強めるための行動を社交とは呼ばない②社交を支える感情として、喜び、祝意、博愛に近い愛、同情に近い悲しみであることを意識的に持っている③時と場所にめぐり合うごとに、それにふさわしい感情を積極的に抱き、その場にある役の感情をつくらなければならない④社交の性質を保障する

ために必要とする条件は時間と空間の限定である。

これらのことから『社交性』とは、個人を表す特徴であり、個人の自律性の要素となり、生来の特質で環境から影響を受けることがない気質や性格と捉えることができる。そして、『社交性』を定義するなら、「自己が帰属する社会において、その存在意義を全うするための意識、行動である」とすることができるのではないだろうか。

2. 『社交性』と高齢者ケアの視座

国は、2025年を目処に医療と介護の両方を必要とする状態の高齢者が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域包括ケアシステムの構築を推進している。そして、在宅医療と介護を一体的に提供するための支援を行うことが必要であると、市町村が主体的に取り組む地域支援事業に在宅医療・介護連携推進事業を挙げている⁵⁰⁾。事業の具体的な取り組みに、高齢者ケアに携わる医療・介護関係者の情報共有の支援や研修等が計画されている。

地域包括ケアシステムの目的は、高齢者の生活の質の向上に他ならない。したがって、高齢者ケアにおいては、高齢者が納得できるソーシャルサポートを受けることができるための支援が重要であろう。高齢者の適応と個人差について、和田⁵¹⁾は、老化への（心理的）適応にアプローチするために①高齢者個々人の間に見られる個人差は、他の年齢集団と比較した場合、きわめて大きいことがしばしば指摘されている②老化への適応を左右する要件の重要性には大きな個人差が見られることから、個人差を視野にいたした分析モデルが必要であると述べている。以上のことから高齢者ケアにおいては当たり前なことではあるが、個人特性に配慮した個々の能力を引き出す支援が求められるであろう。そして本研究で把握した『社交性』は人間関係の構築の重要な要素であることから、高齢者の『社交性』を引き出す、『社交性』を活用するといったケアが求められていると言えよう。

V. まとめ

本研究では『社交性』をキーワードに文献検討し、その研究目的や枠組み、『社交性』の捉え方を分析考察し、『社交性』について整理した。その結果、『社交性』

とは、社会構造や機能に関わる個人特性を基盤とし、個人の社会的存在における目的を達成させるための、自律した生活の質や情報収集、生活スタイル、対人関係における行動に影響を与える因子や関連要因であると捉えることができる。そして『社交性』とは「自己が帰属する社会において、その存在意義を全うするための意識、行動である」と定義することができ、『社交性』をキーワードに今後の支援の仕方を構築することが重要であろう。また、高齢者ケアにおいては高齢者が新たな社会的ネットワークを構成する必要性から、その人間関係を構築するための『社交性』を引き出す、『社交性』を活用する支援の必要もあろう。そして、この結果を今後のフィールド調査で明らかにする必要がある。

引用文献

- 1) 厚生労働省：平成 29 年簡易生命表の概要
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life17/index.html> (閲覧日 2018 年 12 月 25 日)
- 2) 厚生労働統計協会：国民衛生の動向 .Vol65 No.9 2018/2019, 東京 ,p88-91,2018.
- 3) 小林れい子,水戸美津子：配偶者がいない高齢男性のデイケアへの適応に関する研究：デイケアの場になじんでいくプロセス .日本在宅ケア学会誌 ,20 (1) ,55-62,2016.
- 4) 石村秀登：美的教育と社交性—シュライエルマッハーの社会性理論を手がかりに .九州大学大学院教育研究紀要 (1) (44) ,279-287,1998.
- 5) 近藤敏行,小林利宜：K.K.改訂 Bernreuter Personality Inventory (J 型) の作成ならびに標準化について .教育心理学研究 ,8 (3) ,135-143,1969.
- 6) 狩野素朗：Sociometric test における 2 段階地位の定量的研究 .実験社会心理学研究 ,11 (2) ,127-132,1972.
- 7) 山下秋二,多田信彦：地域スポーツクラブの会員間にみられる相互影響性の諸相 .体育学研究 ,27 (3) ,247-257,1982.
- 8) 富山學人：覚醒剤精神病の臨床精神病理学的研究：陰性症状評価尺度による精神分裂病との比較 .千葉医学雑誌 ,63,163-177,1987.
- 9) 新田米子,渥美正子：集合住宅の住戸平面計画に関する研究：食生活と LDK の構成について .岐阜聖徳学園大学紀要 ,87-99,1993
- 10) 栗林克匡,相川充：シャイネスが対人認知に及ぼす効果 .実験社会心理学研究 ,35 (1) ,49-56,1995.
- 11) 永井司,兼松稔他：CAPD 患者の QOL に影響を及ぼす因子の検討 .日本透析医学会雑誌 ,28 (8) ,1127-1133,1995.
- 12) 瓦林達比古,堤啓他：妊婦のパーソナリティ分析とつわり発症の関連性について .日本産科婦人科学会雑誌 ,47 (6) ,547-2,1995.
- 13) 井沢功一朗：抑うつ症状におけるパーソナリティスタイルーストレス交互作用仮説とライフイベント対応一致仮説の検討 .性格心理学研究 ,6 (1) ,1-4,1997.
- 14) 鈴木素子,寺崎正治他：青年期における友人関係期待と現実の友人関係に関する研究 .川崎医療福祉学会誌 ,8 (1) ,55-64,1998.
- 15) 木村留美子,河田史宝他：体験や経験が看護婦の自己評価に及ぼす影響について (1) 自己イメージから .金大医保紀要 ,24 (1) ,143-149,2000.
- 16) 金子晃之：知的障害者施設における援助技術の原理的問題点と権利擁護の課題 .社会福祉学 ,41 (1) ,27-37,2000.
- 17) 松田美佐：大学生の携帯電話・電子メール利用状況 2001 .情報研究 .社会言語科学 ,167-179,2001.
- 18) 岡本真一郎：名古屋方言の使用が話し手の印象に及ぼす影響：Matched-guise technique を用いて .社会言語科学 ,3 (2) ,4-16,2001.
- 19) 岩井俊祐,川本佳代：ハイパーメディアを用いた共同学習が創造的学習の及ぼす影響 .教育メディア研究 ,7 (2) ,13-25,2001.
- 20) 花出正美,佐藤禮子：頭頸部がん治療後 5 年未満の人々のクオリティ・オブ・ライフ .日本看護科学学会誌 ,21 (1) ,40-50,2001.
- 21) 堤雅恵：老人保健施設入所者に対する化粧の効果 .山口県立大学看護学部紀要 ,5,75-80,2001.
- 22) 木村留美子,河田史宝他：臨床経験や年齢が看護婦の自己評価に及ぼす影響 (Part II)：自己イメージから .日本看護研究学会雑誌 ,25 (2) ,29-35,2002.
- 23) 中西晴子：茶道の所作—社会学的考察 .佛教大学大学院紀要 ,31,281-292,2003.
- 24) 棚上奈緒,淵上克義：学校コンサルテーション場面における教師によるスクールカウンセラーの社会的勢力認知に関する研究 .対人社会心理学研究 ,147-152,2004.
- 25) 島田智織,秋元陽子他：リハビリテーション期にある患者への化粧療法への取り組み .ユニフィケーションの視点から .茨城県立医療大学紀要 ,11,163-171,2006.
- 26) 大西良,辻丸秀策他：精神保健福祉現場実習における自己イメージの構造とその影響要因 .久留米大学文学部紀要 ,6,53-61,2006.
- 27) 森川千鶴子,梯正之：地域高齢者における生活習慣と抑うつ状況・性格傾向との関連 .広島大学保健学ジャーナル ,53-60,2006.
- 28) 水野江美,西本実苗他：青年期における友人関係期待と現実の友人関係に関する研究 .川崎医療福祉学会誌 ,8 (1) ,55-64,1998.
- 29) 和田由紀子,佐々木祐子：バーンアウトと対人関係の様相：緩和ケア病棟に勤務する看護師の全体・年代別分析 .日本看護科学学会誌 ,26 (2) ,76-86,2006.
- 30) 毛新華,大坊郁夫：社会的スキルの内容に関する中国人大学生と日本人大学生の比較 .対人社会心理学研究 ,8,128-128,2008.
- 31) 平野真理：レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成 .パーソナリティ研究 ,19 (2) ,94-106,2010.
- 32) 藤村和久：保育士,幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成 .大阪樟蔭女子大学紀要 ,9,129-143,2010.
- 33) 町田佳世子：コミュニケーションの有能感が意欲に及ぼす直接的・間接的影響の解析 .札幌市立大学研究論文集 ,4 (1) ,7-14,2010.
- 34) 藤村和久：保育者特性インベントリーの妥当化 (1) .大阪樟蔭女子大学紀要 ,1,86-96,2011.
- 35) 柳川育子,矢吹明子：現代看護学生の生活及び気質の特徴 (第 2 報) 次元別解析—1987 年,2000 年及び 2009 年の比較— .京都市立看護短期大学紀要 ,36,62-68,2011.
- 36) 吉岡和子,高塚人志他：ヒューマン・コミュニケーション授業の効果研究 (2) .福岡県立大学人間社会学部紀要 ,20 (2) ,53-58,2012.

- 37) 金政祐司：自己目的化尺度の作成とその検証：自尊心、自己愛、友人からの印象との関連から．対人社会心理学研究,12,41-49,2012.
- 38) 長谷川幸代：人々の情報収集における態度とメディア選択—情報収集の状況と個人的な経験・環境による影響をふくめた分析—．情報プロフェッショナルシンポジウム予稿集,10,139-143,2013.
- 39) 藤村和久,石曉玲：保育者特性検査の妥当化（2）育児不安、自己観および YG 性格検査との関連性．大阪樟蔭女子大学紀要,3,63-71,2013.
- 40) 貫田優子：在日外国人留学生の社交性と交友ネットワーク：大阪大学・京都大学の外国人留学生を対象としたアンケート調査から．日本語・日本文化,39,1-24,2013.
- 41) 増田宏司,田所理沙：農学部学生の自己評価に関するアンケート調査．東京農業大学農学集報,58（4）,214-219,2014.
- 42) 沖野慎治,中村晃士他：HIV 感染患者における精神症状と心理的ストレスに関する研究．心身医学,55（2）,156-162,2015.
- 43) 角田英恵,桂敏樹他：新興住宅地の開発がすすむ地域における高齢者の心の健康に関連する要因：コミュニティ感覚,居住環境を含む検討：.日農医誌,64（2）,140-154,2015.
- 44) 西川一二,吉津潤他：好奇心の個人差と精神的健康および心理的 well-being との関連．日健医誌,24（1）,40-48,2015.
- 45) 吉澤朋子：地方自治体の災害リスクガバナンスにおけるソーシャル・キャピタルの重要性について．京都産業大学経済学レビュー,4,36-73,2017.
- 46) 米倉裕希子：障害のある子どもの家族の感情表出研究の進展：最近の動向．関西福祉大学研究紀要,20,137-145,2017.
- 47) 町田佳世子：コミュニケーション能力の構造に対する認識の相違—企業と大学生によるコミュニケーション能力評価の結果をもとに—．札幌市立大学研究論文集,12（1）,29-35,2018.
- 48) 柳井晴夫：尺度開発の課題と今後の方向性．日看管会誌,15（2）,175-184,2011.
- 49) 山崎正和：社交する人間（初版）,p18-19,中央公論新社,東京,2006.
- 50) 厚生労働省：地域支援事業実施要綱 地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律に関する関係政省令等の施行に伴う地域支援事業関係の規定に関する留意事項について．<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000184582.pdf>（閲覧日 2019 年 1 月 13 日）
- 51) 和田修一：発達心理学入門Ⅱ 青年・成人・老人．無藤隆（編）（初版）,p159-160,東京大学出版会,東京,2008.